

## お父さんのやさしさ。

飯島 可奈

私はお父さんがあまり好きではなかった。無愛想で、いつも怒っているように見えてとても怖かった。授業参観の時なんか友達に優しくそんなお父さんを見ると毎回うらやましくなった。そして、こんな人と結婚したお母さんをいつもうらんだ。

ある日私はお母さんに本だながほしい、とお願いした。今まで使っていた本だながうめつくされてしまったからだ。するとお母さんは「お父さんにたのみなさい。」と言った。そうなのだ。私の家では、ほしい物がある『木』でお父さんが作る、なのだ。なぜかという、お父さんの家は代々大工。お父さんはつがなくてフツターのサラリーマンだが、大工並みの技術がある。おかげで私の部屋は木材の茶色にみちあふれている。私的にはネットショッピングで売っているピンクやうすムラサキ色のオシャレな可愛いのがいいのだけれどね。そして、今回もお父さんは私に木材の茶色の本だなを作ってくれた。まあ、私のために作ってくれたと思うと悪い気はしないが、やはり可愛いなが良かったな、と思う。私は本だなをそつとなでた。いつも通り、なめらかなさわりこちだった。

翌日、今日は私が務めている図書委員会の当番の日だった。受付カウンターは他の子がやってくれていたの、私は本の整理を行った。本だなの本のならべかえをする時、右手の薬指が本だなの角の方にこすれた。「痛っ！」私は小声でさげんだ。まだ導入したばかりの本だなの角はささくれていた。その時、ふと、「お父さんの本だならいつまで使ってもささくれないと思うのになあ。」と。そうだそうだったのだ。お父さんは私が見たのみごとで何か作って、と言うといつも木材の角をやすりでといてくれる。その時私はお父さんのやさしさに気がついた。お父さん、ありがとう。

それから、私はあまりネットショッピングで買えるようなピンクやうすムラサキ色の家具をあまりほしがらなくなった。もう指がこすれるのはイヤだ、というのもあったが、何よりもこの理由がしっくりくる。いつも無愛想なお父さんのやさしさに気づくことが出来るのも、お父さんの作った家具でくらしいだ。私はこの本だなが気に入った。お父さん、ありがとう。